

# 現代アメリカにおけるポピュラー文化と 感情の政治

## Popular Culture and Politics of Emotion in the Contemporary United States

### 「悪さ」の取り扱いについて How to Deal with “Badness”?

渡部宏樹  
WATABE Kohki

#### はじめに

2021年1月6日に、トランプ支持者の一団がワシントンDCの米国議会議事堂を襲撃した事件は大きな驚きを持って迎えられた。2020年の米国大統領選挙で民主党選出のジョー・バイデンが共和党選出のドナルド・トランプに対して勝利したが、トランプ支持者の一部は大統領選挙で不正が行われ「選挙は盗まれた」と主張した。議会を襲撃するという暴力的な手段で選挙結果を覆そうという試みそれ自体がクーデターに相当するのではないかという懸念もあったが、それに加えてトランプ支持者たちの現実認識やイデオロギーがポピュラー文化的な実践を通じて共有されていることも衝撃の一因となった。議事堂に乱入した暴徒の中には通称「Qアノン・シャーマン」と呼ばれるジェイコブ・チャンスリー（Jacob Chansley）がおり、彼のバッファローの角や毛皮を纏い、刺青を施した姿は、政治的活動を行うものとは思えない異様な風体だった。チャンスリーが属するQアノンと呼ばれるオンライン・コミュニティは2017年ごろから形成された陰謀論に基づく政治運動である。Qアノンのコミュニティの中では、民主党に所属するエスタブリッシュメントたちが実は裏では悪魔崇拝や性的人身売買を行うディープ・ステートを組織しており、この悪の集団がみな逮捕される「嵐」の日まで、正義のドナルド・トランプが孤軍奮闘しているという物語が信じられてい

た<sup>1</sup>。こうした荒唐無稽の陰謀論が人々に信じられた背景には、日本の旧「にちゃんねる」を模したインターネット掲示板「8chan」などのネット文化が貢献していることが明らかになっている<sup>2</sup>。したがって、米国議会議事堂襲撃事件は政治的事件であるだけでなく、ポピュラー文化と混じり合った陰謀論が、ことの深刻さを十分に理解していない多くの人々をクーデター未遂に動員してしまうその影響力の大きさと深刻さによって特徴付けられる事件であった。

ドナルド・トランプの人気のポピュラー文化が寄与しているという認識は2021年の米国議会議事堂襲撃事件よりも前から存在していた。『サバイバー』のプロデューサーであるマーク・バーネットが企画したリアリティーテレビ番組『アプレンティス』に出演し、「お前はクビだ」の決め台詞はドナルド・トランプの強権的なボスとしてのイメージ形成に寄与した<sup>3</sup>。2016年の大統領選で民主党のヒラリー・クリントンに勝利した際には、トランプ支持者たちが自発的に「カエルのペペ」というキャラクターにトランプを重ね合わせたミームをネット上で拡散し、トランプの勝利に多少なりとも貢献したと言われている<sup>4</sup>。ポピュラー文化の領域における彼の有名性が、彼の政治的力に影響を与えていることは、2010年代の半ばから広く認識されていた。しかし、遅くともこの議事堂襲撃事件によって、単にポピュラー文化のセレブリティが自身の有名性を政治的影響力に変換するというレベルではなく、ポピュラー文化の論理やレトリック自体が強力に制御できない力をもっていることが一般に広く理解されたと言える。

このような状況は、より一般的に、「私たちの社会生活、そして政治活動や言説実践に関わる政治的生活にとって、あるいは個人や集団、コミュニティについて理解するうえで感情が中心的な役割を果たしている」<sup>5</sup>と言うこともできるだろう。カリン・ウォール＝ヨルゲンセンはこの立場から、メディアを通じて表現される感情を、個人の内側に発生する感情とは異なり、公共圏の中で他者に対して戦略的に行われるパフォーマンスであるとみなし、この「メディア化された感情（mediated emotion）」の種類やその影響力の機序や効果を分析している<sup>6</sup>。議事堂襲撃事件に先立つ2019年の著作の中で、ウォール＝ヨルゲンセンはトランプ支持者のファンダムに一章を

あてている。英語圏で使われている掲示板 **Reddit** における彼らの投稿を分析する中で、トランプ支持者たちがトランプに対す愛情を示すことがコミュニティに対する忠誠心の表明として機能し、この愛情の表明が敵とされる他者——この場合、主にヒラリー・クリントン——に対する非難と分かち難く結びついていることを議論した。この愛情と怒りや憎しみの感情の複雑な結合状態が、彼らのアイデンティティーの排他性を促していた<sup>7</sup>。ドナルド・トランプと彼の支持者の周辺に発生する現象は、こうした感情の政治について考える際のうってつけの事例である。

しかし、これは感情の政治の問題、あるいはポピュラー文化が政治と溶け合ってしまった問題の原因がトランプにあるということではない。議事堂襲撃事件の衝撃に応答する形で考えると、ついトランプ的なものをこうした問題の原因としてとして想定する問いの立て方になってしまう。そうした問いの立て方は、問題の複雑さにある一つの要因に還元して説明しようとしてしまう。しかし、感情の政治の出現にしてもポピュラー文化あるいは広く文化が政治と一体化してしまうという問題にしても、アメリカ史あるいは人類史の中で目新しい現象というわけではない。

本稿はこのような問題意識から、以下のように議論をする。まず第1節では、インターネット時代の初期からポピュラー文化を取り入れた広義の政治的現象が存在していたことを示し、ポピュラー文化が感情に訴えかける力を政治的動員に利用するトランプ現象が、程度の差こそあれ、トランプに由来するものではないことを明らかにする。第2節では、映画『ジーザス・クライスト・スーパースター』（1973年）を分析し、ジーザスというスーパースターに熱狂する信徒たちを批判的に描き出す同作品が、21世紀においてトランプ主義と名指されるような現象に対する問題意識に貫かれたテキストであることを論じる。このことを明らかにすることで、トランプ現象を21世紀の新しい事象ではなく、より長い射程で捉え直す。続く第3節ではポピュラー文化をその文字通りの意味に従って「人々の文化」として考え、資本主義社会において提供される文化商品と区別し、20世紀後半以降のアメリカ社会においてこの「人々の文化」がアクティヴィズムを含む広義の政治的領域の中に根付いていることを示す。第4節では、しかしながら、「人々の文化」

がアメリカ社会に根付いているからこそ、その延長線上にトランプ主義が発生したという認識に基づき、だとしたら、ポピュラー文化から分かちがたい「悪さ」——市民社会の規範からすると低劣であるがだからこそ人々に感情的にアピールする欲望や快楽——の存在を無視して、感情の政治とポピュラー文化の関係を考えることはできないことを論じる。

## 1. インターネット時代における感情の政治と ポピュラー文化の動員

ポピュラー文化を政治活動に取り入れるという現象は、ドナルド・トランプに始まるわけでもなければ専売特許というわけでもない。インターネットが普及しいわゆる「ドットコム・バブル」と呼ばれるインターネット関連企業の株高が顕著であった2000年代初頭には、ブログのような新しいメディアを使った政治活動が生まれていた。ヘンリー・ジェンキンズは『コンバージェンス・カルチャー』の「YouTube時代の政治を振り返る」と題する章の中で、2005年に公開されたYouTubeを使った新しい政治活動を多数紹介し、インターネット・メディアを使った政治活動の可能性を基本的には肯定的に評価している<sup>8</sup>。インターネット上の遊びがどうしても悪ふざけになってしまうことに目配りしつつも、ジェンキンズはインターネット上の草の根の参加型文化が人々の政治参加の能力を育み、大局的には民主主義の活性化に寄与する未来を提起した。

トランプとポピュラー文化の関わりを相対化するために、ジェンキンズが議論する事例の中から一つ取り上げてみよう。2007年にビジネスマンのベン・レルス（Ben Relles）はYouTube上に開設している自身のコメディ・チャンネル「ほとんど政治的ではない（Barely Political）」に「オバマに夢中（Crush on Obama）」というミュージック・ビデオを公開した。動画の中ではリア・カフマン（Leah Kauffman）の歌に合わせて、俳優でモデルのアンバー・リー・エッティンガー（Amber Lee Ettinger）がリップシンクで「私オバマに夢中なの」と歌い踊り、その姿が当時上院議員であったバラク・オバマの画像とコラージュされるというものである（図1、図2）<sup>9</sup>。この動画



図1 「オバマに夢中」より



図2 「オバマに夢中」より

はヒットし、「オバマ・ガール」としてシリーズ化し、レルス、エッティンガー、カフマンはさまざまなテレビ番組に出演することになった。動画の中では具体的なオバマの政策についての言及はないが、ジェンキンズによれば、この動画の面白さを理解するためにオバマの政策への興味関心を掻き立てることになるという<sup>10</sup>。「オバマに夢中」の動画はオバマや民主党の支持者が制作したものではなく、「カエルのペペ」同様、その影響力がどの程度あったかはわからない。しかし、この「オバマ・ガール」現象は、インターネットが普及するかなり初期の段階から、真面目な政治だけではなく、ポピュラー文化の修辞や図像学を政治運動に取り込む活動が存在していたことを示している。

2008年の大統領選に際して、オバマ陣営は「オバマ・ガール」の動画に関与していないことを表明し、オバマ支持者であるレルスらもそのことを認めた。したがって、オバマ陣営がこうしたポピュラー文化を積極的に動員したわけではない。オバマ自身は、のちに娘たちがこのビデオに否定的であることを表明し釘を刺しつつも、「インターネットの豊かな想像力を示す例であり、こうした現象はもっと出てくるであろう」<sup>11</sup>とコメントし、決して強い拒否反応を示してはいなかった。オバマの「こうした現象はもっと出てくるであろう」という予測は、トランプ現象によって実現したという言い方もできるだろう。言い換えると、インターネットが人々の間に広く普及してしまえば、政治的立場とは関係なく、この種のポピュラー文化と政治を融解させてしまう遊びが出てくることは止めようのない状況になっていた。ひとたびこの種の遊びがインターネット上で人気が出るのがわかってしまえば、政治的目的のためにポピュラー文化を動員の道具として利用する人々が出現



図3 ハリーとハーマイオニー



図4 地元商店街の危機の原因のウォルマート

することは止めることができない。だとすると、感情の政治の出現の責をトランプに帰することはできない。

実際に、ポピュラー文化を政治的動員の道具として利用する現象は、選挙という場面だけでなく広い意味での政治である労働運動の中でも見られた。例えば、大規模小売チェーン店ウォルマートにおける労働問題に取り組む非営利団体「ウォルマート・ウォッチ (Walmart Watch)」は、「ハリー・ポッター連盟 (Harry Potter Alliance)」と協力して、彼らの活動に注目を集めるための「ハリー・ポッター」の二次創作動画を公開している<sup>12</sup>。ハリーポッター連盟は、もともと「ハリー・ポッター」をテーマにした音楽活動である「魔術師のロック」に取り組んでいたアンドリュー・スラック (Andrew Slack) が、スーダンにおける人権侵害問題に取り組むために立ち上げたNPOである。「ハリー・ポッター」シリーズの世界観やキャラクター設定を使って、多くの社会問題に取り組む活動を行っており、ウォルマート・ウォッチとの提携もその一環である<sup>13</sup>。この両団体が協力して制作した動画の中では、主役のハリーとハーマイオニーがダイアゴン横丁の商店が経営的危機に陥っていることに気づく (図3)。この経営危機がウォルマートならびに原作の悪役である「ヴォルデモート」に準えた「ヴォルデマート」というキャラクターによって引き起こされていることが説明され (図4)、主人公たちは地元の経済を守るためにウォルマートではなく地元の商店で買い物をする意識に目覚めるという内容である。この動画が公開されたのは2006年であり、アメリカにおいて市民団体が2000年代の半ばにはポピュラー文化を政治運動に利用していた事例の一つであると言える。

世界的に店舗を展開しているウォルマートが労働問題に限らずさまざまな

問題で批判を浴びていること自体は事実である。だが、この動画の中では、ウォルマート側には反論の機会がなく、世界的に人気の映画の悪役と同一化して悪魔化されているのも事実である。ウォルマート・ウォッチとハリー・ポッター連盟の主張に理があるとしても、とはいえ、ポピュラー文化の修辞や文法や図像学が転用されることで、事実をベースにした議論や対話とは別の次元で政治的な力学が作動し始めていることも否定できない。したがって、イデオロギー的な立場は正反対であるが、ハリー・ポッターを使った二次創作動画は、トランプ現象の前触れとも言えるだろう。

## 2. トランプ主義の問題を先取りしたテキストとしての『ジーザス・クライスト・スーパースター』

ポピュラー文化を利用した感情の政治は、このように少なくともインターネットが普及した 2000 年代初頭にはすでに見られるものである。こういった現象は、歴史上どこまで遡れるだろうか？ アメリカ史に限っても、例えば、クー・クラックス・クランは陰謀論ファンダムの一形態であるとか、『コモンセンス』はアメリカで最初に作られた政治的同人誌であるというようなアナロジーを展開することは可能だろう。このように考えていくと、人類史のかなり初期にもポピュラー文化を利用した感情の政治を見出すことができ、古代ローマ帝国における「パンとサーカス」までは確実に遡ることができるだろう。政治的なものがあるところには必ず、サーカス（娯楽）を使った動員が存在しているだろうという予測はなりたつ。

ポピュラー文化による政治的動員が歴史を遡っても見出せるとしたら、それは政治と娯楽の不可分性を示しているのであり、真面目な政治と不真面目な娯楽という区別が成立している（と思ひ込むことができた）ことのほうが例外的な事態である。だとしたら、この政治と娯楽の不可分性への問題意識がどのように練り上げられるかの方が重要である。これもおそらく、例えばプラトンの『国家』におけるいわゆる詩人追放論のように、人類史の初期まで遡ることはできるであろう。本稿はこのポピュラー文化と感情の政治についての人類史的な考察の歴史を詳細に追うことが目的ではない。しかし、少





図 5 ジーザスを囲み歌い踊る信徒たち(『ジーザス・クライスト・スーパースター』より)

なくとも、アメリカ社会の中に、政治と娯楽の不可分性に対する問題意識がインターネットの出現よりも早くから存在していたことを指摘したい。本節では、1973年に公開されたロック・ミュージカル映画『ジーザス・クライスト・スーパースター (Jesus Christ Superstar)』(ノーマン・ジュイソン監督、ユニバーサル・ピクチャーズ)を一つの参照点として、このハリウッド映画が現代においてトランプ現象と呼ばれる政治と宗教とポピュラーな熱狂が混じり合う状況を内省的に描き出していることを議論する。

同作は、ジーザス・クライストを宗教的指導者というよりはスーパースターとみなし、ジーザスに熱狂する宗教的ファンダムがあまりに大きな期待や欲望を彼にぶつけるために、その重圧に耐えきれなくなる様を描いている。同作の中盤、ジーザスを崇拝する信徒たちが彼の前で、ジーザスへの愛を歌う。その歌詞は以下の通りである。

Christ you know I love you.  
Did you see I waved?  
I believe in you and God  
So tell me that I'm saved.  
Jesus I am with you.  
Touch me, touch me, Jesus.  
Jesus I am on your side.  
Kiss me, kiss me, Jesus.

クライストよ 愛しています  
信じるものは救われますよね  
あなたに従います  
どうか私に触れて  
私はあなたの味方  
この私にキスを<sup>14</sup>



ジーザスを囲んで、歌い踊る人々は、このように彼への愛を語るが、その愛は無条件のものではない。「信じるものは救われますよね」という報酬を期待した条件付きの愛である（図5）。そして、崇拜の対象であるジーザスが私に「触れ（touch）」し「キス（kiss）」するという肉体的な触発を伴った情動的な関わりを望んでいる<sup>15</sup>。つまり、この集団は感情的あるいは情動的な紐帯によってジーザスと結び付けられており、その点ではトランプ支持者のオンライン・コミュニティと同様のものである。のちにジーザスを裏切ることになるイスカリオテのユダは、このようなジーザスを崇拜する熱狂を疑問視し、遠巻きにこの姿を眺めている。ユダは、ジーザスを中心に熱狂する人々の姿が、正統派のユダヤ教徒やローマ帝国から潜在的な危険として認識されることを危惧している。つまり、ユダはこの宗教的ファンダムが政治的な効果を持ちうることを早くから認識しているのである。

実際に、このシーンの中盤に、群衆の中から熱心党のシモン（Simon the Zealot）が現れ、ジーザスに向けて囁きかける内容（図6）は、ユダが危惧した未来へと歩みを進めるものであった。その歌詞は次のとおりである。

There must be over fifty thousand	少なくとも5万人の民衆が
Screaming love and more for you.	あなたへの愛を叫んでいる
And everyone of fifty thousand	その5万人がひとり残らず
Would do whatever you asked them to.	あなたの指示に従うでしょう
Keep them yelling their devotion,	あのまま忠誠心をあおり
But add a touch of hate at Rome.	ローマへの憎悪を少しかき立てれ
You will rise to a greater power.	ばいい
We will win ourselves a home.	あなたは絶大な力を手に入れ
You'll get the power and the glory	我々は祖国を取り戻す
For ever and ever and ever	権力と栄光はあなたのもの
	いつまでも永遠に

シモンの論理も、愛を差し出す代わりに何かを得ようとする群衆たちの欲望と同型の構造を持っている。つまり、5万人以上の愛を呼びジーザスのためであればなんでもする群衆に対して、「ローマへの憎悪を少しかき立てれ



図 6 ジーザスに語りかける熱心党のシモン(『ジーザス・クライスト・スーパースター』より)

ば」、ジーザスは「権力と栄光」を得るというのだ。そして、シモンはジーザスに「権力と栄光」を掴ませる代わりに、その力を利用して「祖国を取り戻」そうとしている。ここで、シモンはジーザスのポピュラリティーを梃子にして政治的力を振るおうとしている。

シモンの駆使する修辞は、トランプ支持者のものとも重なり合う。トランプ支持者の主張は、外国勢力あるいは国内に入り込んだ移民のような外部というものが国内の問題の原因であり、それらを排除することで、「アメリカを復活させよう (Make America Great Again)」というものである。これはシモンがジーザスに「ローマへの憎しみ」を煽れば力を手にすると囁くのと構造的には同型である。さらに言えば、この修辞的構造はトランプ批判者の側にも見出すことができるだろう。トランプ自身の振る舞いが排外主義や女性差別を加速させていることは間違いないが、仮にトランプを問題の原因として実体化してトランプを取り除きさえすれば問題が解決するという論理で反トランプを核とした集団を作るのだとしたらその集団の中には一定程度同様の修辞的メカニズムが駆動している。

映画『ジーザス・クライスト・スーパースター』は、こうした感情の政治がポピュラーなものを動員するメカニズムに対する考察という側面がある。本作は圧政者であるローマ帝国に抵抗する初期のキリスト教徒たちという善悪二元論的な物語ではない。確かに地下洞窟で暮らすキリスト教徒たちは抑圧される者として描かれているが、前述のとおり、彼らの中にも憎しみを煽

ることで内部の凝集性を高めようという構造が存在している。この点を批判的に描き出していることが、同作の批評的射程を深めている。作中のローマ帝国の兵士の姿が、金属のヘルメットと紫のタンクトップと迷彩柄のズボンという現代のイスラエル兵士を想起させるものであり、一方で地下に隠れ住むキリスト教徒たちに現代のパレスチナ人のイメージが重なることも含めて、複雑な文脈が織り込まれた作品となっている。

したがって、本作は史実のジーザス・クライストと信者たちやローマ帝国の関係を描こうとしたものではない。役者たちがバスでロケ地に乗り付け普段着から映画内の衣装に着替えるところから映画が始まるというメタシアター的な手法を使って、20世紀後半のアメリカにおける現代生活と1世紀の過去とを重ね合わせている。そうすることで、20世紀におけるスーパースターという形象と古代における宗教指導者を重ね合わせ、感情の政治とポピュラリティーを利用した動員という現象を一般的な問題として描きだしている。この作品の中の「スーパースター」は日本の文脈に置き換えれば「アイドル」となるであろうし、だとすると、シモンの修辞とトランプ支持者の修辞の間のアナロジー的な関係と同じものが、現代の日本にも見出すことができるだろう。

いずれにしても、『ジーザス・クライスト・スーパースター』は本稿の問題意識を凝集させたテキストであり、アメリカ社会はトランプ出現以前からトランプ主義と名指される問題を指摘していたと言える。ならば、トランプ主義にのみ拙速に反応して、「トランプ主義に対抗してポピュラー文化をうまく作って使って市民社会や民主主義を取り戻そう」という発想をすることは、長期的な歴史的視野を欠いており、そのような試みはおそらくうまくいかないだろう。なるほど、たしかにポピュラー文化の力でファンダムを作り出し、それを政治的な運動の母体として利用するという戦略は有効であろう。しかし、それが何らかの悪とされる外部に照準することで立ち上がるのだとすると、「ローマへの憎しみ」を煽るシモンや、移民や女性を攻撃するトランプ主義者や、トランプだけを原因とみなす反トランプ主義者と変わりがない。少なくとも『ジーザス・クライスト・スーパースター』は、感情によって駆動されるファンダムなりコミュニティなりが政治的力を持ってしまう



図7 ジーザスの真意を理解できないシモン(『ジーザス・クライスト・スーパースター』より)

構造へ内省が埋め込まれている。シモンがジーザスに語りかけるこのシークエンスの後半に、それまでのアップテンポの熱狂と対比して落ち着いたゆっくりとしたペースで、ジーザスが跪く信徒たちに向かって「お前たちは何もわかっていない」と歌い返す。このシークエンスには、シモンの顔のアップが挿入され、彼がジーザスの懸念を何も理解していないことが示唆される(図7)。熱心党のシモンは「ローマへの憎しみ」を煽ることの長期的な帰結を想像していない。シモンをこそ覚醒させなければならない。

### 3. アメリカにおけるポピュラリティーとアクティヴィズム

さて、本稿の趣旨は、トランプ現象への反応としてではなく、歴史的な長い射程でポピュラー文化と感情の政治の関係を考える必要があるというものである。この観点からすると、ポピュラー文化に限らずより一般的にアメリカにおけるポピュラーなものやアクティビズムを含む広義の政治活動の関係を歴史的に振り返ってみる必要がある。ここで、「ポピュラーなもの」と言い換えたのは、そもそもポピュラー文化という単語が使われる時に、あまりにも商業化されたエンターテインメントのコンテンツのことが想起され過ぎていることが、「ポピュラー性 (popularity)」という語の本来のポテンシャルを狭めてしまっているからだ。ポピュラー文化というと、例えば、瓶や缶に入ったコーラであるとか、アップルが作っている iPhone や Mac であると

か、ソニーやニンテンドーが作っているゲーム作品であるとか、ディズニーやスタジオ・ジブリが作っている映画であるとかが想像されてしまう。しかし、ここで列挙した事例はあくまで資本主義社会の中における文化商品のことである。「ポピュラー文化」という語の「文化」という部分が人々の活動を意味することに焦点化する場合、これら文化商品は字義通りには「ポピュラー文化」ではない。

文化産業が作るポピュラー文化商品はあくまで商品であってそれは文化ではないという原理原則に戻って考えなければ、現代におけるポピュラー文化と政治の問題は正確に理解できない。なぜならば、感情の政治がポピュラー文化を動員の道具として利用できるのだとすれば、それは人々に自発的に何かをさせてしまう「ポピュラー性 (popularity)」が重要だからだ。人々が何かを自発的に行なってしまうこの種のポピュラー文化の活力は、『コンヴァージェンス・カルチャー』の中で肯定的に取り上げられた。同書には娯楽商品を受動的に享受するだけではなく、娯楽商品を資源として人々が文化を作り出すことへの信頼があった。これはアメリカのファン研究の文脈では「参加型文化」として、日本の文脈では二次創作として名指され、その背景には文化商品を自分独自の力で流用し改変する人々の活動こそが文化だという認識がある<sup>16</sup>。歴史的過去に存在するものとは異なる、理念としての未来の「人民戦線 (popular front)」に相当するものを構想しようとするならば、ここから再出発し、文字通り「人々の文化」としてのポピュラー文化がどのように実践されているのかに注目する必要がある。

もちろん、人々の自発的参加を称揚しさえすればよいというものではない。参加型文化や二次創作文化さえも、資本主義によって包摂され利用されている。資本主義社会の中で提供される文化商品は、基本的に資本主義自体を拡大させるように機能する。したがって、文化商品を流用したり改変したりして政治的動員の道具としようとする観点は、常に資本主義に包摂されてしまう可能性から逃れられない。つまり、市民社会や民主主義のための道具として文化商品を利用しようとしても、文化商品が侵入することによって、その文化商品を生み出す資本主義の力の前に敗北してしまう事態は考えるべきである。しかし、かといって、資本主義の外側からその抜本的な革命を目

指すのでないとしたら、私たちはこの資本主義の現実の中から具体的なより良いアクションを起こさなければならない。

具体的に一つ、資本主義の文化商品を資源として人々が文化を立ち上げる可能性というものを考えてみよう。英語圏の漫画やアニメや映画のファンの間には「レースベンディング (race bending)」と呼ばれる実践がある。簡単に説明すると、フィクションのキャラクターの人種を変更して二次創作として描いたりコスプレをしたりする実践を指す<sup>17</sup>。例えば、日本の漫画作品のキャラクターは作品の文脈からして確実に日本人やアジア人である場合や、あるいは現実世界の人種の概念が適用されない設定のものが多い。こういったキャラクターを、アフリカ系やラテン系の人たちが彼らの外見上の特徴を適用して二次創作するものがレースベンディングである。この実践の一部は、オンライン上では、ホワイトウォッシュへの対抗としてブラックウォッシュと呼ばれている。もともと、ハリウッド映画産業の中では非白人の登場人物に白人の俳優が当てられることが「ホワイトウォッシュ (whitewash)」として批判されてきた。ホワイトウォッシュへの対抗として、非黒人のキャラクターを黒人として描く実践が、「ブラックウォッシュ (blackwash)」と呼ばれハッシュタグ化されオンラインで広がったのである。

レースベンディングは、ソーシャル・メディアを使って拡大した運動ではあるが、歴史的に見た場合、このような文化実践は決して新しい現象ではない。例えば、映画研究においては、1970年代にアメリカの中産階級が郊外に移転し都市部に残された低所得の黒人やラテン系のマイノリティーの若者にブルース・リーが人気であったことが明らかにされている<sup>18</sup>。ブルース・リーという小柄なアジア系の若者が巨漢の白人男性を蹴飛ばして倒す姿に、アメリカ社会の中で差別されているマイノリティーの若者たちは自分自身を投影し、そうすることで彼ら自身の快楽を引き出していた。商品として与えられる自分とは異なるエスニシティの人間の表象を利用して、自分自身のための快楽を生み出す文化であるという点では、70年代のブルース・リーの受容も現代におけるレースベンディングも同じような構造を持っている。

ブルース・リーからレースベンディングに至る活動はあくまで個人の自発



的な活動を基盤にしているものだが、こうした個人と文化商品との接する部分に社会改良のための介入が必要だという認識はアメリカ社会の中で共有されており、制度化された「ポピュラー性」の教育や政治への利用という動きもアメリカ社会には見られる。例えば、「セサミ・ストリート」はこうしたポピュラー文化の形式を市民社会の改良に利用しようとするより制度化された活動の事例と言っているだろう。1969年に放映開始されたテレビ番組である「セサミ・ストリート」は、公共放送サービス（PBS）が制作しており、子どもに十分な教育機会を提供できない低収入のシングル・マザー家庭の子供に、小学校入学前に教育的な番組を見せることで、収入の差による教育格差を縮めることが目的であった<sup>19</sup>。「セサミ・ストリート」以前にも教育的なテレビ番組は存在したが番組としての魅力の点で十分ではなく、同番組の制作者たちは、マペットを使った娯楽的な要素を取り入れた。

「セサミ・ストリート」はテレビという新しいメディアが低所得の家庭にも普及していくときの取り組みであったわけだが、パーソナル・コンピュータとインターネットが普及した現代においても同作品に相当する活動は生み出されている。ニューヨークに拠点を置く WNET という公共放送サービスが手掛ける「ミッション US」というプロジェクトは、現代における「セサミ・ストリート」と言っているだろう。同プロジェクトは、アメリカ史における重大事件をテーマとするシリアス・ゲームを研究者やアーキビストと協力して制作し、無償で公開することで、子供たちが架空のキャラクターを通して歴史を学ぶ機会を提供するものだ。現在、アメリカ独立戦争から公民権運動までをカバーする7つのゲームを公開している。その中の一つ、Prisoner in My Homeland は、日系アメリカ人が第2次世界大戦中に強制収容された歴史を、ヘンリー・タナカという架空の若者を操作して追体験するものである<sup>20</sup>。

「ミッション US」が「セサミ・ストリート」同様、公共放送サービスによって実現されていることは、本稿の論旨に照らして重要であろう。米国における公共放送サービスとは約350の放送局による非営利のテレビ・ネットワークで、主に教育的な番組を放送している。連邦政府も資金を拠出しているが、個人・企業・民間団体などからの寄付金も運営に使われており、大学

が放送局を運営していることもある。日本の NHK と比較すると、同じ「公共放送」と言ってもその実態が大きく異なる。非常に雑駁なまとめになるが、粘り強く活動している人はいるものの、日本社会全体では 20 世紀後半のどこかで市民参加やアクティビズムが低調になったように見える。一方、民間からの寄付金によって公共放送サービスが成立していることは、アメリカ社会における市民社会やアクティビズムの根強さを示しているかもしれない。そして、市民参加を育てるとともにその実践でもある公共放送サービスが、古くはマペット・ショウを利用して「セサミ・ストリート」を作り、近年はビデオ・ゲームの形式を利用して「ミッション US」を制作したように、ポピュラー文化のフォーマットを利用してアクティヴィズムを行う歴史の厚みがアメリカ社会には存在していると言える。

ポピュラー文化という言葉から想像するものを与えられる文化商品ではなく、そこから具体的な活動を通して人々が文化を立ち上げるプロセスに意識を向ける必要がある。その観点からアメリカの現代史を振り返ってみた時に、アメリカではポピュラー文化とアクティビズムの距離は、日本と比較して近い。しかし、このような対比を見出すことで、アメリカには伝統的にポピュラー文化を利用した政治参加の歴史があると主張したいわけでもなければ、翻って、日本がアメリカに比べて遅れているとか逆にこれからのポテンシャルがあるのだという議論をしたいわけではない。むしろ全く逆に、アメリカにおいてポピュラー文化が市民の政治参加やアクティヴィズムと近接していたのだとするならば、21 世紀初頭のドットコム・バブルの時のインターネットを使った市民社会の可能性を寿ぐ議論や、「オバマ・ガール」の政治的動画から 2010 年代のトランプ現象までもが、このアメリカの伝統の延長線上にあることを深く考え直さなければならないのである。

#### 4. 「悪さ」の取り扱い

本稿はここまで、トランプ現象を深く考えるためにはポピュラー文化と政治の関係を検討する必要があるとする立場から、文化商品を資源として人々が文化を生み出す過程に注目すべきだという議論を行ってきた。この観点か

らは、第二次世界大戦後のアメリカ社会には、この「人々の文化」という意味でのポピュラー文化の力がある程度機能していると言えるだろう。このように、現代のトランプ現象をアメリカにおけるポピュラー文化と感情の政治の長く深い関係の系譜に位置付けたとき、トランプ現象の中にある「悪さ」をより長い射程で捉え直すことができるのではないだろうか？

文化商品を生み出す資本主義は常に私たちの欲望や快楽の構造を刺激して自分自身を購入させるわけだが、その欲望や快楽の中には常になんらかの「悪さ」のようなものがある。例えば、ドナルド・トランプを支持する快楽の構造が『ジーザス・クライスト・スーパースター』の中に一般化した形で表現されていることはすでに述べた。熱心党のシモンがジーザスに「あのまま忠誠心をあおり／ローマへの憎悪を少しかき立てればいい／あなたは絶大な力を手に入れ／我々は祖国を取り戻す」という物言いをするときには、外部の他者を悪魔化することによる連帯というメカニズムが存在する。「オバマ・ガール」のビデオは、水着の女性身体を提示し「恋 (crush)」という強い感情を示してみせることで視聴者の目を惹きつけようとする戦略をとっている。ウォルマート・ウォッチとハリー・ポッター連盟による「ハリー・ポッター」の二次創作動画にみられる文化商品の流用には、日本のBL同人誌が少年漫画のキャラクターを利用し元の作品に存在しない同性愛関係を作り出していたように、原作の文脈を転用したものであり、ここにはフィクションに対する暴力性があると言える。

こうした「悪さ」は必ずしも邪悪なものとは言えない。例えば、男性にしる女性にしる、主体的に自分自身の性的魅力を自分が支持する政治家や政治団体の応援に利用すること自体は、その使用の程度やTPOによって意見が分かれることはあるだろうが、原理的には否定できない。もちろん、政治的空間を純粹に理性的な議論の場と厳密に考えるならば話は別だが、現実を観察したときに政治が感情や情動と関わる現象であることは明らかだ。政治というものが現に理性と論理だけの場ではないからこそ、文化商品の魅力やポピュラー文化というものが政治の場でも機能するのであり、だからこそ、ここで仮に「悪さ」として大まかにまとめられる感情的あるいは情動的作用が問題となる。文化商品が私たちの「悪さ」を刺激することを無視しては、

「ポピュラー文化を良き政治のためにうまく利用しよう」という発想は、恐らく長期的に考えた時にこの「悪さ」に足元をすくわれるだろう。

『ジーザス・クライスト・スーパースター』はこの点を象徴的に描き出している。自分の来歴に疑問を持ち荒野を放浪するジーザスは、異形の集団に囲まれ、彼らの抱える問題を救済するように求められる（図8）。群衆の歌う歌詞を見てみよう。

## CROWD

See my eyes, I can hardly see.  
 See me stand, I can hardly walk.  
 I believe you can make me whole.  
 See my tongue, I can hardly talk.  
 See my skin, I'm a mass of blood.  
 See my legs, I can hardly stand.  
 I believe you can make me well.  
 See my purse, I'm a poor, poor man.  
 Will you touch, will you mend me Christ?  
 Won't you touch, will you heal me Christ?  
 Will you kiss, you can cure me Christ?  
 Won't you kiss, won't you pay me Christ?

## JESUS

There's too many of you...Don't push me.  
 There's too little of me...Don't crowd me.  
 Leave me alone

## 群衆

見て 私は目が不自由なの  
 俺は歩くのが困難なんだ  
 あなたなら治せるはず  
 俺はほとんどしゃべれない  
 皮膚がただれて血だらけなの  
 俺は立つのも難しい  
 あなたなら治せるはず  
 俺の財布は空っぽだ  
 どうかこの体に触れて直してくだ  
 さい  
 あなたの接吻でこの身を救って

## ジーザス

多すぎる 押すな  
 そんなに期待するな 押さないで  
 くれ  
 そんなに私に求めるな！

ジーザスは悪魔によって誘惑されるのではなく、民衆の健康になりたいというそれ自体としては決して邪悪ではない欲望によって押しつぶされる。信徒たちが言うところの「愛」は何らかの現世的な見返りを想定したものであることはすでに述べたが、この「愛」が実のところこうした欲望に根ざしており集合的に作用すると「悪さ」となることがこのシーンで明確に描き出されている。



図8 救済を求める群衆に取り囲まれるジーザス(『ジーザス・クライスト・スーパースター』より)

この構造は現代の日本社会の中で考えるならばアイドルという現象を支える構造として理解できる。アイドルたちは歌やダンスの優れた技能を披露することは少なく、アイドル同士の関係性やアイドル自身が成長していく姿を感情的商品として提供し、ファンたちに対して感情労働を行っている。その感情労働の一部に恋愛が組み込まれることもあり、だからこそ、恋愛禁止という不文律に反して交際をするアイドルはファンから非難される。『ジーザス・クライスト・スーパースター』におけるジーザスのように、過剰な期待がアイドルたちに向けられているのだ。

このようなファンダムの集団的熱狂の構造は、現実の政治の世界において政治家を凝集点として具体的な強い政治的推進力を持つこともありうる。我々はすでにそういった事例をトランプ支持者たちを通して観察した。オバマにしてもトランプにしても、単に代議制というシステムの中である機能を果たすというだけの存在でなく、この種のスーパースターあるいはアイドルとしての感情的・情動的回路を人々と築いているのである。『ジーザス・クライスト・スーパースター』という映画を現在の状況に対する批判性を有したテキストとして読むならば、同作はこうした個人崇拜を核にした感情の政治的動員への依存が、崇拜される個人も破滅させ集団も暴走させてしまうことを描きだしていると言える。ごく素朴に言えば、この「悪さ」の問題を避けるためには「英雄のいない社会をつくろう」ということになり、これは市民社会の理念の基本的な部分である。

「英雄のいない社会をつくろう」という理念は、例えば、台湾のデジタル担当大臣オードリー・タンが試みていることであろう。コロナ感染症に対応する中で、タンは政府の持っているマスクの在庫情報を公開し、そのデータに基づいて市民ハッカーたちがどの薬局にマスクがどれだけあるかを可視化するアプリを作り出した<sup>21</sup>。タンはアナーキストを自称しているが、彼女のいうアナーキズムには情報公開によって人々が協力できるようにデジタル技術を使うという相互扶助の理念が核にある。彼女が中国に対して自由と民主主義の国としての台湾をアピールする役割を演じている面もあるだろうが、だとしてもタンが実際に行っていることは市民社会の理念に沿ったものだ。タンは『コンヴァージェンス・カルチャー』の日本語版の帯文に「参加型テクノロジーによって、私たちはメディアのリテラシーだけでなくコンピテンシー（実行力）を手にした。本書はこのことを全世代に知らせた。」と書いたが、この帯文は次のように続く。

私たち自身のメディアと物語（ナラティブ）を社会的に作り出すことが集団的な覚醒へと繋がるのだ。本書で描かれる現象は、「ひまわり運動」など台湾で目下進行中の民主化プロジェクトを支えているものである。「達成可能なユートピア」というヴィジョンを通じて、私たちはロックダウンなしでパンデミックに、テイクダウンなしでインフォデミックに反撃できたのだ。＜Demos over Demics＞という宣言である<sup>22</sup>。

ここでタンは、当然、「デモス（人々）」による「クラシー（支配）」としてのデモクラシーを念頭に＜Demos over Demics＞という修辞を駆使しているわけだが、本稿のここまでの議論と響き合うものである。つまり、ポピュラー文化が「人々の文化」であると考え直して現代の感情の政治状況を捉え返そうという本稿の趣旨と、人々が自身の力で政治を運営するのだというデモクラシーの理念とは、別個のものとして分けて考えることが難しくなる。このようにして、感情の政治がポピュラー文化を利用して人々を動員しているという問題意識が、デモクラシーを考え直すことと一致する。



## 5. おわりに

本稿はタンの立場を未来に向けての処方箋として提示したいわけではない。なぜならば、彼女の世界の中には「悪さ」が存在しないからだ。タンが道筋をつけたマスクの在庫可視化システムは善意の市民ハッカーたちによる協働と言え、そのことの価値は否定されるべきものではないが、本稿がここまで見てきて通り、インターネット上の政治現象には「悪さ」が付き纏っている。

この点について考えるために、最後に、「私たちだけのアーカイブ (Archive of Our Own、通称 AO3)」を紹介しよう。「私たちだけのアーカイブ」は、主に英語で書かれた二次創作の小説を保存・共有するためのオンライン・アーカイブである。2009年にウェブサイトが公開され、2023年9月時点では1175万以上の作品が公開されており、その中には性的・ポルノ的な要素を含むものが多数含まれている。2000年代前半には営利企業がこうした二次創作作品を公開するプラットフォームとして機能していたが、ファンダムが共有しているものから利益を得ようとする営利企業の行為に贈与経済的な規範意識を持つファンダムは反発した。こうしたことから、二次創作作品を保存し共有する非営利の場を求める機運が高まっていた。2007年に非営利団体が立ち上げられ、2年後に「私たちだけのアーカイブ」が公開された<sup>23</sup>。

「私たちだけのアーカイブ」という名前は、ヴァージニア・ウルフのフェミニズム批評エッセイ集『自分だけの部屋 (A Room of My Own)』に由来する。ウルフの場合は女性が「小説ないし詩を書くのであれば、年に五百ポンドの収入とドアに鍵のかかる部屋が要る」<sup>24</sup> と言い、個人に焦点化したのに対して、「私たちだけのアーカイブ」はその名が体现する通り、コミュニティの存在を重視したものである。「私たちだけのアーカイブ」は、ポルノ的なものも含めてまずは快楽の認識が必要だと考えており、できるだけ表現の自由を広く認める方向で活動している。市民社会という理念に照らしたときにポルノや性的な快楽というものは低劣な「悪い」ものとして捉えられることが多い。本来、性欲はそれ自体として悪いものではないが、しかし、

その「悪い」とされる快樂こそを人間の存在の核として肯定的に捉えるのが「私たちだけのアーカイブ」の姿勢である。

「私たちだけのアーカイブ」が「悪さ」をそれでもなお公共性の中心に位置付けた姿勢は、インターネット時代における感情の政治とポピュラー文化の関わりについて示唆を与えるものだ。『ジーザス・クライスト・スーパースター』においてジーザスを崇拝する群衆は愛の名の下にジーザスを通じて自分たちの欲望を満たそうとしていた。トランプの支持者たちも排外主義や女性差別に駆動される欲望と感情の回路を形成している。ジーザスであれ、オバマであれ、トランプであれ、こうした他者の形象を利用して自身の欲望を満たそうとするとき、シモンがそうであったように、そのことの「悪さ」に気づけない。だとすると、必要なことは「悪さ」を認識し、自分自身の欲望に向き合うことである。ウルフは創作活動のために「自分1人の部屋」を必要としたが、「私たちだけのアーカイブ」は二次創作を共有し、他者の欲望を使って私の欲望を照らし出す、感情的で情動的な半公共的な空間である。ウルフと異なって「ドアに鍵のかかる」わけではない他者の欲望に開かれた「私たちだけのアーカイブ」で、自分自身の「悪さ」と欲望に向き合う象徴的マスターベーションが、熱心党のシモンや私たちには必要なのだ。

## 註

<sup>1</sup> 藤井学思『Qを追う：陰謀論集団の正体』朝日新聞出版、2022年、17-18頁。

<sup>2</sup> 藤井学思『Qを追う：陰謀論集団の正体』朝日新聞出版、2022年、19-22頁。

<sup>3</sup> マーク・バーネットとリアリティ TV 番組『サバイバー』についてはヘンリー・ジェンキンズ「第1章『サバイバー』のネタバレ——知識コミュニティの解剖学」『コンヴァージエンス・カルチャー：ファンとメディアがつくる参加型文化』渡部宏樹、北村紗衣、阿部康人訳、晶文社、2021年、61-113頁が詳しい。

<sup>4</sup> カエルのべべについては映画『フィールズ・グッド・マン』（アーサー・ジョーンズ監督、2020年）が詳しい。また同映画については渡部宏樹「映画『フィールズ・グッド・マン』オルタナ右翼に「利用」されたカエルのべべの数奇な運命」[https://note.com/watabe\\_kohki/n/nb261f7c20ee1](https://note.com/watabe_kohki/n/nb261f7c20ee1) も参照のこと。

<sup>5</sup> カリン・ウォール＝ヨルゲンセン『メディアと感情の政治学』三谷文栄、山腰修三訳、勁草書房、2020年、15頁。

6. カリン・ウォール＝ヨルゲンセン『メディアと感情の政治学』三谷文栄、山腰修三訳、勁草書房、2020年、5-19頁。
7. カリン・ウォール＝ヨルゲンセン『メディアと感情の政治学』三谷文栄、山腰修三訳、勁草書房、2020年、183-207頁。
8. ヘンリー・ジェンキンズ「YouTube時代の政治を振り返る」『コンヴァージエンス・カルチャー：ファンとメディアがつくる参加型文化』渡部宏樹、北村紗衣、阿部康人訳、晶文社、2021年、465-500頁。また同章で紹介されている代表的な動画は、次のWebページでリンクをまとめている。渡部宏樹「『コンヴァージエンス・カルチャー』あとがき「YouTube時代の政治を振り返る」リンク集」[https://note.com/watabe\\_kohki/n/ncaedba564fb1](https://note.com/watabe_kohki/n/ncaedba564fb1)
9. The Key of Awesome, “Crush on Obama,” <https://www.youtube.com/watch?v=wKsoXHYICqU>
10. ヘンリー・ジェンキンズ「YouTube時代の政治を振り返る」『コンヴァージエンス・カルチャー：ファンとメディアがつくる参加型文化』渡部宏樹、北村紗衣、阿部康人訳、晶文社、2021年、465-500頁。
11. Clayworth, Jason (June 19, 2007). “Obama responds to ‘crush’” . *Des Moines Register*. アーカイブデータを <https://web.archive.org/web/20080211114524/http://blogs.dmregister.com/?p=6506> より取得。
12. Walmartwatch, *Harry Potter and the Dark Lord Waldemart*, 2006, <https://www.youtube.com/watch?v=no0WqYWdH74>
13. Henry Jenkins, “‘Cultural acupuncture’: Fan activism and the Harry Potter Alliance,” *Transformative Works and Cultures*, Vol. 10, 2012. <https://doi.org/10.3983/twc.2012.0305>
14. 歌詞の和訳はDVD収録の岡剛子訳に従った。以下同じ。
15. いわゆる情動論的展開以降、感情 (emotion) と情動 (affect) 並びに気分 (feeling) といった関連語は区別され議論されている。本稿はこの議論に深入りしないが、興味のある方は、柿並良佑、難波阿丹編『「情動」論への招待：感情と情動のフロンティア』勁草書房、2024年を参照されたい。
16. 渡部宏樹「ヘンリー・ジェンキンズ：媒介される文化」伊藤守編『メディア論の冒険者たち』東京大学出版会、2023年、286-297頁。
17. Watabe K. Subject playing with flat images: Transmedia spreadability of anime and manga character images [version 2; peer review: 2 approved]. *F1000Research* 2023, 12:191 (<https://doi.org/10.12688/f1000research.129643.2>)
18. Ongiri AA. “He wanted to be just like Bruce Lee” : African Americans, Kung Fu Theater and Cultural Exchange at the Margins. *J. Asian Am. Stud.*2002; 5(1): 31–40.
19. Edward L. Palmar and Shalom M. Fisch, “The beginnings of Sesame Street Research,” *G Is for Growing: Thirty Years of Research on Children and Sesame Street*, New York and London: Routledge, 2011, pp. 5-8.

- <sup>20</sup>. Prisoner in My Homeland については次の Web ページで基本情報をまとめ、亜細亜大学の今野裕子氏にご出演いただいたゲーム実況動画を公開している。渡部宏樹「日系米人の強制収容を描いた Prisoner in My Homeland 実況動画まとめ」2022 年。https://note.com/watabe\_kohki/n/n06129a9621fc
- <sup>21</sup>. 大野和基『オードリー・タンが語るデジタル民主主義』NHK 出版、2022 年、48-50 頁。
- <sup>22</sup>. タンの帯文は晶文社ウェブサイトに掲載されている。https://www.shobunsha.co.jp/?p=5978
- <sup>23</sup>. Archive of Our Own “About the OTW,” Archive of Our Own, archiveofourown.org/about.
- <sup>24</sup>. ヴァージニア・ウルフ『自分ひとりの部屋』片山亜紀訳、平凡社、2015 年、181 頁。